**【願文】**

**たるはら苦にして安きこと無く、たるは、ただいにして楽しからず。**の日久しく隠れて、の月いまだ照らさず。三災の危うきに近づき、の深きに没む。

しかのみならず、保ちく、消えし。 草堂、楽みなしといえども、しかも老少白骨を散じし、土室、闇くせましといえども、しかもを争い宿す。を、をるに、このせり。

 いまだ服せざれば、留め難し。いまだ得ざれば、いつとか定めん。生けるとき善をさずんば、死する日獄のとらん。

**得難くして移り易きはそれ人身なり。し難くして忘れ易きはこれ善心なり。** ここをもっては、大海の針、妙高のをりて人身の得難きをす。古賢は、一寸の、半寸のを惜しみて、一生の空しく過ぐることをせり。 **因なくして果を得るは、このあることなく、善なくして苦を免がるるは、この処あることなし。**

**して己がを尋ね思うに、無戒にしてかに四事のりを受け、にしてまた四生の怨とる。**この故に、『』に云く、施す者は天に生まれ、受くる者は獄に入る、と。女人の四事の供は、の福と表われ、貪著利養の五衆の果は、の罪と顕わる。明らかなるかな、善悪の因果、誰かの人か、このを信ぜざらんや。然れば則ち、苦因を知りて、しかも苦果を畏れざるを、釈尊はと遮したまい、人身を得ていたずらに善業を作さざるを、に空手と嘖めたまえり。
　ここにおいて、**愚が中の極愚、狂が中の極狂、の、の最澄、は諸仏にい、は皇法にき、は孝礼をけり。**しんで迷狂の心に随い、三二の願を発す。無所得をもって方便となし、無上第一義の為にの心願を発こす。

我れいまだの位を得ざるよりこのかた、せじ。その一

いまだ理を照らす心を得ざるよりこのかた、才芸あらじ。その二

いまだ浄戒を具足することを得ざるよりこのかた、檀主の法会にからじ。その三

いまだの心を得ざるよりこのかた、世間の人事のにせじ。の位を除く。その四

三際のに修するところの功徳は、独り己が身に受けず、くにして、く皆を得せしめん。その五

**伏して願わくは、の味い、独り飲まず、安楽の果独り証せず。法界の衆生と同じく、に登り、法界の衆生と同じく、妙味を服せん。**もしこの願力に依りて、六根相似の位に至り、もし五神通を得ん時は、かならず自度を取らず、正位を証せず、一切に着せざらん。

願わくは、かならず、のにせられて、ねく法界を旋らし、遍く六道に入り、仏国土を浄め、衆生をして、を尽すまで、に仏事を作さんことを。

**【現代語訳】**

**果てしなく続くこの迷いの世界は、ただ苦しみばかりで心が安らぐことはありません。その世界でうごめく生きものたちは、憂いごとばかりで楽しいことはありません。**お釈迦さまが入滅して長い歳月が経つというのに、次の世の仏（弥勒仏）はまだ現れません。戦乱や病気、飢饉などの災いに苛まれ、この世は汚辱にまみれています。

それだけではありません。人の命は風のごとく保ちがたく、この肉体は露のごとくはかなく消えていきます。老いも若きも死んでしまえば皆同じで、お墓の中で楽しみもなく白骨を散らし、身分の賤しい人も貴い人も狭く暗いなかに押し込められるのです。他人を見ても自分を見ても、その道理には例外がありません。

不老長寿の仙薬でも飲まなければ、この命を長らえさせることはできません。神通力でもない限り、自分の死期を悟ることはできません。ですから、生きているうちに精いっぱい善いことを行っておかなければ、死んだときに地獄の炎で焼かれることになるでしょう。

**人間に生まれることはとても難しいもので、生まれたとしても、もろく移ろいやすいものです。善き心というのはなかなか起し難いもので、起こしたとしてもすぐに忘れやすいものです。**

それだからお釈迦さまは、人身を得る難しさを、大海に落とした針を見つけるようなものであるとか、高くそびえる山の頂上から垂らした糸を麓の針孔に通すようなものだと譬えているのです。

古代中国の夏王朝を建てた禹王も、寸暇を惜しんで日々を大切に暮らし、一生が空しく過ぎていくことを嘆いたと言います。**原因がないのに結果を得ることはできないように、善いことをしないで、苦しみを免れようとするのは道理ではありません。**

**自分のこれまでの行いをふり返ってみると、形ばかり受戒しただけで僧侶としての戒めを守っていない（無戒）にもかかわらず、生活に必要なものは何不自由なくあてがわれ、悟りの道には程遠い愚かなこの身は、きっと世間に恨まれることでしょう。**

『未曽有因縁経』には「いつも人に施すことを心掛けている者は天に生まれ、いつも人から施しを受けてばかりの者は地獄に堕ちる」と言っています。また同じ経典には、という名の信心深い女性が五人の偽の僧侶らを信じて彼らに布施を行っていたおかげで、生まれ変わって舎衛城の波斯匿王の妃・末利夫人となり、偽って布施を受けていたその五人の僧侶らは奴隷の女性となって妃の輿を担ぐことになったという話があります。恥を知る者であれば、必ずやこの因果応報の話を信じるでしょう。それなのに因果の道理を否定し、苦しみの原因を知りながらその結果を恐れない者のことを、お釈迦さまは「一闡提」（救いようのない者）と呼び、せっかく人身を得たのに善いことをせずに無駄に過ごす者のことを、宝物を目の前にして何も手に入れない者だと厳しく叱責したのです。
　そこでわが身をふり返ると、まさに**愚か者の中でも愚か者の極み、狂人の中でも狂人の極み、塵や芥にも劣るどうしようもない坊主頭の最低な最澄です。僧としては仏の教えにも従わず、民としては国の法律にも背き、子としては父母への孝行も欠けています。**

こんな愚かな狂人の迷いの心に生じるままに、いくつかの誓いをここに立てました。それは何ものにも捉われない自由な境地で、無上の悟りを得るために不壊不退の硬い決意で発した私の願いです。

一つ、仏とほぼ同じぐらい清らかな身にならない限りは、人を導くことはしません。

二つ、真理を見極める心が養われない限りは、世俗の才芸には関わりを持ちません。

三つ、戒律をしっかり守れない限りは、施主からの布施は受けません。

四つ、空を悟ってとらわれのない心を体得できない限りは、世俗の生業ごとや人付き合いはいたしません。ただ、仏とほぼ同じぐらいの境地に至った場合は別である。

　五つ、修行で得た功徳を自分だけのものにせず、一切衆生に施して、すべての人が無上の悟りを得られることを願います。

**何よりも願うのは、苦しみから解放された喜びを一人だけで味わうことをせず、安らかな境地を一人だけで至ることもせず、この世の生あるものすべてとともに悟りたいのです。**たとえこの願いの力で仏の身に近づくことができ、神通力を自在に操ることができたとしても、自分だけが救われて悟りの境地に至ろうなどとは思いません。あらゆるすべてのこだわりを捨てましょう。

大いなるに導かれて六道輪廻の迷いの世界に入り、仏国土を浄め、一切衆生が救われて仏となるまで、未来永劫片時も休まず仏道に専念することを誓います。